

## 映画「ハーストリー」の制作者たちと話し合いました

2018年10月

映画「ハーストリー」の制作者たちに抗議文を出すとともに対話を呼びかけていましたが、10月20日に監督とプロデューサーが福岡に来られ、3時間余り話すことができました。

プロデューサーは映画を守る立場があり、こちらの言葉はほとんど入らなかったようですが、監督はよく勉強もしておられて「善意」でこの映画を作られていることは理解できました。

そして彼は韓国社会の「慰安婦」認識と日本社会への固定観念に抜きがたく影響されていて、そこが大きな問題だと考えざるを得ませんでした。

私たちは、勤労挺身隊と日本軍「慰安婦」は連行過程も被害実態も全く違うのに、映画では4人の原告のうちただ一人の挺身隊原告を「慰安婦」にさせられたという虚偽の被害者にしてしまっていることで、遺族、関係者のみならず、生存しておられる挺身隊被害者を傷つけるもので容認できないことを繰り返し伝えました。

そのことは監督には理解してもらえたようで、今後の上映・他に必ず反映すると言っていたので、どのように反映されるのか見守りたいところです

もう一点私たちが訴えたのは、関釜裁判を闘った10年間、一度も右翼の攻撃や市民の嫌がらせにあったことがないことです。映画では街頭行動で石を投げられるなどの攻撃や、裁判所での傍聴者によるヤジ、裁判官たちの冷ややかな態度、市民社会での嫌がらせになど、日本での孤立した闘いであることを強調していますが、そんなことは全くなかった。マイナーであるけれど多くの日本人に支えられ、当時の日本社会は比較的寛容でした。

それが下関判決を下した裁判官たちの良心と勇気として表れています。

日本社会への一面的な見方による思い込みは安易に反日感情を煽り、そのことが日本社会に伝播し嫌韓という反発を強めることになるかと訴えました。

この訴えをどのように反映していただけるか確認は取れませんでした。これも見守っていきたいと思います。

私たちは、監督たちが帰られた後、本編の始めに字幕で説明を入れるのがよいと話し合いました。

以下は、対話にあたって支援する会から訴えたことです。

関釜裁判の原告 10 名のうち 7 名が元勤労挺身隊の方々です。勤労挺身隊被害はそれ自体が深刻なのに「慰安婦」被害と混同されることで、挺身隊被害者は自らの被害を隠さざるを得ず、話すことができませんでした。そのみならず、知られたら離縁されたり、家族の中で蔑視されたりしました。そのことが彼女たちの心身を戦後長きにわたって傷つけてきています。この映画では登場している 4 人の原告のうちただ一人の挺身隊の方が慰安婦にさせられたという虚構の物語になっています。

それは挺身隊イコール「慰安婦」としてきた韓国社会の偏見を助長するもので、被害者をさらに傷つけています。

また、「慰安婦」被害も関釜裁判と関係のない方の被害を切り貼りし興行的に脚色しています。植民地下での戦争被害の真相究明に取り組んできた被害者をはじめとする関係者の努力を無にするようなもので、この映画を観た若い方々がこれを歴史的事実として記憶していくとしたら恐ろしいことです。

また、90 年代日本社会は被害者に対し好意的でした。その象徴が下関判決を下した裁判官の良心であり、勇気でした。

映画にあるような街頭行動での右翼による攻撃や裁判所でのヤジや市民社会での宿泊拒否のような嫌がらせはありませんでした。日本社会への一面的な見方による思い込みは安易に反日感情を煽り、翻って日本社会においては反発を強めることになるでしょう。

支援する会の願いは日韓の友好であり、和解でした。この願いを踏みにじる内容になっています。

関釜裁判をベースにすると言うのなら、裁判を起こした原告の思い、支えた弁護士の思い、支援者の思いを理解した上で脚色をして欲しかったです。

関係者のほぼ全てが被害者の心身の傷の癒しと名誉回復、戦争被害の真相究明、日韓の和解を願っていたにもかかわらずその願いを踏みにじる内容になってしまっていることが本当に残念です。

(追記)

関釜裁判を支援する会の事務局メンバー・花房恵美子の実名を何の連絡もなく、了解も得ず映画で使用した件を抗議しました。制作者側は謝罪されました。